

相乗効果を求める日本史指導

——指導報告を通じて

齋藤 禎夫

Tadao SAITO

はじめに

高等学校における日本史の授業がどうあるべきか、これは、解答がない永遠の課題であり、また、歴史観や授業観が人それぞれであるだけに難しい問題である。すぐに解答を得ることはできないが、望ましい歴史の授業を考えるにあたり、組み立てる各教員が念頭におかなければならない事項を列挙し、また、その共通点を見出すことは可能である。それは、誰もが追求しなければならない大切なことのように思える。理想ではあるが、歴史の授業を展開する上で、誰もが抱く最終的目標としてあげられることの一つは、歴史は、日本史にせよ世界史にせよ、「これからの日本史」「これからの世界史」であり、実生活に役立つための過去の考察でなければならぬとい

うことであろう。ただしそれを授業の中のみで理解させ、また考えさせるのは不可能なことである。授業を受ける立場の人間が、授業外において、歴史を知る過程で実践されることである。そのためには、歴史の流れからはじまり、過去の事実を把握できていなければならぬのである。つまり、生徒自らが、過去の事実を参考に、実生活に役立てられるよう、歴史を理解させることを目標に、指導案が考案されていくべきである。そして多くの高等学校には、そこに、もう一つ大きな課題が課せられている。大学受験に対応するための実力向上を目指した受験指導である。受験指導以外の指導をここでは「これからの歴史」あるいは「これからの日本史」とあえて呼ばせてもらうが、各教員により考え方はまちまちで、また教科によっても違いがあるようだが、「これからの日本史」と受験指導を別なも

のと考える傾向が感じられる。会話の中での話であるが、餅は餅屋的発想からであろう、受験指導は塾や予備校に任せておけばよいという話を聞いたことがある。

私は、地歴公民科の教員として二十年を経過しているが、最近十年は、自分の専門である日本史を担当しない年はなく、その間、受験指導もできて、「これからの日本史」に導く授業の両面を目指し、努力してきたつもりである。そして常に思うことは、この両者は、別々に考えられるものではなく、相乗効果によって発展するもので、またそれを目標に指導されていくべきものと思われる。

この度、このように研究成果の発表機会が与えられたため、「これからの日本史」と受験指導をどのような観点に立ち、どのように実施してきたかを報告することで、教科をこえての多くの指摘を頂き、自己を振り返る材料にしたい。また、とかく、歴史は暗記の教科であると受け止められがちであるが、たとえ受験指導であっても「これからの日本史」に導くことが可能であるということを、一人でも多くの方にお伝えできたらと願うところである。

1. 歴史を理解させる

過去の事実を追求することで実生活に役立てる。これが理想であるが、現状でははなかなか難しい。はじめにも述べたように、これは、歴史を学んだ生徒が授業外で各自実践していくことである。よって授業はその方向へ導くことを目標に展開されるべきである。そ

れでは理想の方向へ導くためには何が大切であるかという問題になるが、それはいかに歴史を理解させるか、ということだと思ふ。暗記ではなく理解させる。これは歴史を学ぶ基本で、どの教員も指導にあたり工夫されているところであろう。が、特に私は、理解した内容よりも理解する過程の重要性を強調したい。よく教室で口にすることであるが、歴史を知ることよりも知る過程が大事である、と。歴史を指導する教員が思った口にする、驚かれるかもしれないが、理解する過程をしっかりと踏んだなら、忘れてもよいのではないかとまで思ってしまうのである。一教科の人間が他教科の事に口をはさむのは良くないが、高等学校で生徒が多くの教科を学ぶのは、その内容を理解することよりも過程を経験するところに意義があるのではないかと考えている。自分が接してきた多くの教科においても、出来はどうあれ、一応真面目に取り組んできたつもりであるが、英語にしても数学にしても恥ずかしいことに何一つ頭には残っていない。だが取り組んできたことが無駄であったとは思われない。たとえ頭に残らなくても、もつと良い取り組みをしてきたならば、その取り組みを自己形成に、さらに役立てられたのではないかと反省の思いが強いのである。

そこで歴史の授業を展開する際、取り組む過程が重要であることと、過程が重要に成りうる取り組みを、常日頃から把握させる努力が必要である。そして望ましい取り組みができた場合には自然に記憶されるようになり、またさらに奥深いことや、別の時代も知りたくなってくるという事を自ら気付かせるのが望ましい。過程が重要

となるための指導の注意点として、私は長年にわたり、二つの事柄を指導の中心に置いてきた。それは、「歴史の流れ」と、「史料の重要性」である。この二点についてまずは考察したい。

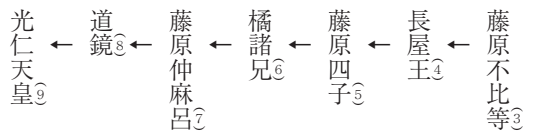
○「歴史は変遷なり」

歴史を参考に自らの考える力を養っていく為には、勿論過去の事実の羅列で終わっては意味がなく、政治の政策や、人物の活躍が、歴史的にどのような意味合いや意義があったかを指導していかなければならぬ。しかしその授業を聞くにあたって、今自分が聞いている時代がどのような時代背景であるか、または、その時代が、一つの時代の中でどのあたりにあたるのか、把握されずに授業を受けている生徒が多いのではないかと思われる。講義を展開する教員側も、ある程度は理解されていることを前提に授業が行われている。望ましいのは生徒が授業を受ける前に、教科書の読み込みが予習としてなされ、その上で歴史的事項の意味合いや意義が教えられていくべきであろうが、優秀な生徒でも実践している生徒は稀である。または、授業の後で復習として行われてもよいことだがそれも期待できない。考查一週間前になって必死に教科書を読み、流れが把握できた時には、教員が自ら考えさせる為にしたせつかくのよい話もどこかに飛んでいってしまったのが現状である。

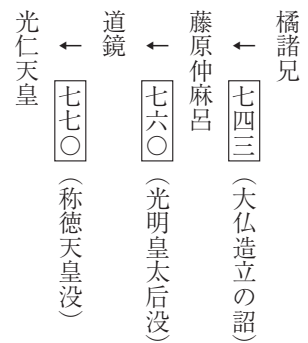
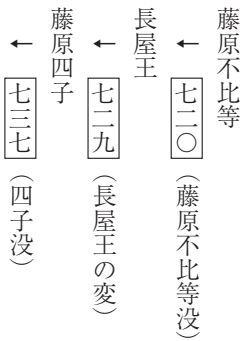
歴史を自己形成にも役立てるには、まずは流れをつかむことが大切なことなのである。化学における元素記号、数学における定義や公式などが、歴史においては流れ、すなわち変遷にあたるわけであ

る。この流れを理解させるにはどのようなにしたらよいかということになるが、歴史には必ず原因・結果・理由が存在するため、それを追求することを目的に、事典等を利用して、内容を理解するよう努める事を促すことは当然であるが、私が指導の上で、常に実践していることは、一つの時代に段階を設け、一つの歴史的事項がこの段階に位置するかを把握させることである。その段階の区切り又はポイントとは年代により理解させていく。歴史を覚えるというよりは、一つの歴史的事項が区切られた段階のどの時期に位置するかを把握させて、歴史を利用しての考察に役立てようということである。これを誰もが知っている人物・政策が登場する奈良時代を例にあげて説明してみる。

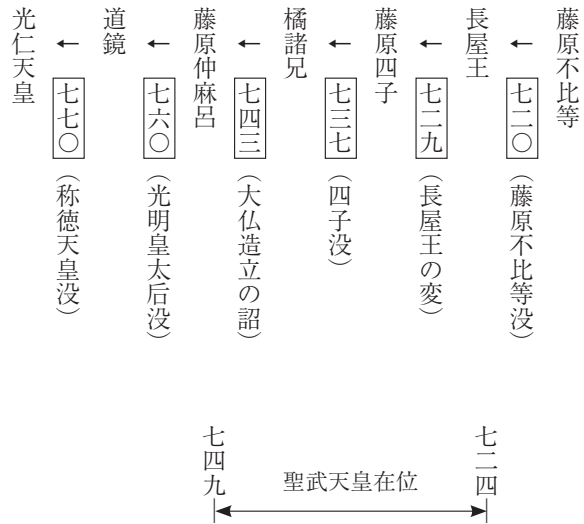
奈良時代とは、政治上の時代区分⁽¹⁾で、政治の中心が平城京にあった時代であり、平城京遷都の七一〇年から長岡京に遷都される七八四年までをいうことは周知のとおりである。奈良時代の変遷は政治の中心人物が誰であったかを理解することを目的に、教科書では順を追って表記されている。政治的にも、社会的にも、文化的にも、奈良時代の考察をする上では、この政治的変遷が、化学の元素記号や数学の公式の役割を果たすことをしっかりと認識させ、ポイントになる年代において、確実に流れを理解させることが重要である。政治の中心人物を古い順に並べると



となるが、この順番を理解させ、それを歴史的考察に役立てる為に、
 変わり目の年代をポイントにおいてやるのが大切である。どの出
 来事をポイントにするかは指導者によりかわってくるであろうが、
 妥当と考えられる歴史的事項をポイントに置くと以下のようにな
 る。



奈良時代の変遷を理解させる変わり目の年代六項目と、その理由
 を置いてみたが、その理由の考察については、ここでは避けるが、
 いろいろな観点から別の年代が考えられる箇所はいくつかあげられ
 る。この六項目の年代のうち、教科書の本文に出てくる、年代は、
 長屋王の変(七二九)と大仏造立の詔(七四三)の二つであり、残
 りは指導する必要のない年代であるが、生徒が知らなくてもよい年
 代をこのようにはじめに覚えさせることで、一つの歴史的事項が奈
 良時代約八十年間の中でどの時期になるのが明確になってくる。
 この全体の中における位置付けがなされていないと歴史の意味合い
 や意義の考察も難しい。奈良時代の場合には、聖武天皇¹⁰の政策が大
 きなカギとなるため、私は、この変わり目の年代に加えて、聖武天
 皇在位(七二四〜七四九)の時期も同時に覚えさせてから、聖武天
 皇の仏教政策等の歴史の意味合いや意義を理解させる展開で指導し
 ている。先ほどの奈良時代全体の変遷に、聖武天皇在位の時期を加
 えると以下のようになる。



生徒は概して、「試験に出るから覚える」「入試に必要であるから覚える」というように目先の損得のみを追求して勉強しがちであるが、このように知る必要がない年代も覚えることで、一つ一つの歴史的事項の時期が明確になり、自分で教科書を使用して勉強するにせよ、授業で歴史的意味合いや意義にまつわる話を聞くにせよ、歴史が追及されやすくなるのである。また、後に述べる受験指導においても当然大きな効果を発揮してくれる事相違ない。政争が多く政権がめまぐるしく変化する奈良時代においては、政治の中心人物を利用しての時期区分であったが、どの時代においても視点を変えて

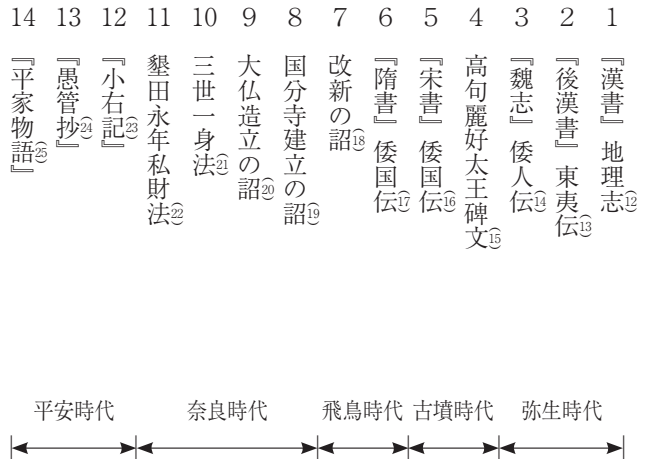
の段階分けや時期区分は可能である。あらゆる時代においても実践が必要である。

○史料学習の重要性

高等学校の日本史において新たに課せられるものが史料学習である。日本史を受験科目に選んだり、また進学コースに分かれる際、日本史コースを選んだ場合には、教科書とほぼ同じ厚さの史料集の購入が義務づけられ、この史料勉強の負担を考えたがゆえに世界史を選択する高校生も少なくないと思う。世界史でも史料は登場するが日本史ほどの量は要求されず、日本史を選択した場合には史料学習に取られる時間が多くなる事は事実である。しかし、この史料の学習を指導によつては、歴史事実を明確にし、さらに歴史を追及しやすい状態に導くことは可能である。勿論受験に史料は必須であり、受験勉強にも直接役立つのである。ではこの史料を指導においてどのように利用していくかであるが、私は、日本史の指導をしてきているこの約十年間必ず実践していることは、史料の丸暗記を徹底させることである。暗記がどのような効果をもたらすかという問題から考えてみることにする。

中学生・高校生の時期に文章を丸暗記させられた経験は誰もがもっていると思う。私の中学校の国語の先生が、よく暗記を強制した先生で、そのため、現在でも『平家物語』と『奥の細道』の冒頭の文章は、自然に口にすることができるとある。これを暗記させた先生の意図は未だに理解できず、また、文章が口にできて助かつ

た、あるいは役に立ったという記憶もない。しかし、三十年以上たった現在でも頭に残っているということは当時無我夢中で必死に覚えたことは確かである。そして、覚えようとした時には特に意味を考えるわけでもなく、機械的に暗記していたが、その後記憶されている文章の意味や、時代背景を考えることは、自然に行われていたのである。頭に入っていないければ『平家物語』や『奥の細道』について考えることも特になかったと思う。そこで思うことは、もしこの必死に暗記を試みた時に意味を理解し、時代背景も考えながら暗記をしていたならば、機械的に覚えるよりもっと容易に暗記が可能であり、『平家物語』や『奥の細道』に対する意味合いや意義の考察も行われていたに違いない。さらには古典に対する意識も深まっていたかもしれないのである。歴史を勉強させる上で大切なことである内容の理解と、それをもとにその歴史的意義の考察を、史料の強制的暗記によって行おうということである。当然暗記に対する取り組む姿勢が大切になってくるが、暗記によって内容の理解がいくら深まることは確実である。そして大切なことは、先に述べた歴史の流れに生徒自ら気づかせるためにも、最も重要な史料を一つのみ暗記させても暗記が歴史の理解を助けることにはならない。一定の時代においていくつかの史料を取り上げ、多数の史料を暗記させ、その関連性等を考察させた時に強制的暗記が、日本史理解に役立つのである。史料が多数登場する古代史において、私が生徒に暗記を強制している史料は以下の十四項目である



時代区分と照らし合わせてみると、バランスよくとはいかないが、一つの時代区分にいくつかの史料が存在する。つまり、必死に意味や時代背景を考えながら暗記した時、前の史料との関連性を自然に考えるようになり、歴史がつながると同時に、時代全体の様子も明確となってくる。言いかえれば、この十四項目のうち、指導する人間が、最も重要であると考える史料を一つのみ暗記させても意味がないのである。このあたりを、前と同じ奈良時代を取りあげて考えてみたい。

奈良時代に必要と思われる史料は四項目であるが、まず聖武天皇の仏教政策である国分寺建立の詔（七四一）と大仏造立の詔（七四三）に注目したい。聖武天皇の時代（七二四～七四九）は政治的事件や疫病の流行等により社会的不安の多い時代であった。仏教を厚く信仰していた聖武天皇が鎮護国家²⁶の思想から国毎に国分寺と国分尼寺を設けさせる命令を発した。七重塔を建て、金光明最勝王經など護国の經典を備えさせ、国分寺には僧二十人、国分尼寺には尼十人ずつをおくこととした。こうして全国的な大事業が国毎にすすめられたわけであるが、その過程で、聖武天皇は、全国一丸となつて一つの事業である盧舎那大仏造立を思い立ち、命じたのが大仏造立の詔である。十年を要して完成する東大寺の大仏はこのように、聖武天皇の意識の変化によって生まれるのである。また聖武天皇は一枝の草、一把の土をもつて造像に参加することを呼びかけており、あらゆる方面からの寄付を期待していた。そのことが土地政策である墾田永年私財法（七四三）にあらわれている。この法令は、七〇一年、大宝律令の制定によって完成した律令国家が早くも奈良時代の前半に衰退し、律令国家の原則である土地公有の原則を維持できなくなり、土地の私有を認める事となったために発令されたものである。その土地の私有を期限付きで認めたのが三世一身法（七二三）である。そして仏教政策の二段階目である大仏造立の詔と土地政策の二段階目である墾田永年私財法は、ともに七四三年でこの二つの法令が同じ年に発令されているのは偶然の一致ではないとされている。つまり墾田永年私財法で私財を認めることにより、財力

を持つおもに貴族階級より、大仏造立のための寄付を期待しているというものである。このように、奈良時代における四つの法令がつながってくるのである。これらの史料の内容を理解しながら、勿論時期も念頭において暗記を試みた場合には、暗記の過程で聖武天皇の意図や奈良時代の様子が自然に定着してゆき、これからの日本史の土台となり、忘れない日本史となつて、受験勉強にも効果を發揮してくれるのである。単なる歴史的事項の羅列や一つの史料のみの暗記では、このような歴史的考察は期待できない。ただし、史料暗記を通じて、歴史を理解させるにあたっては、指導する上で当然注意が必要となってくる。その注意点を何点が挙げてみる。

1. 暗記させる過程で歴史を理解させるため、内容や意味を考えながら史料を回数多く読ませることが必要である。
2. 一つの史料で暗記に費やす時間は、個人差はあると思うが、多くても三十分を超えないこと。受験用語として必要な用語はなるべく含むようにし、意味が取れる範囲で、必要のない部分ははぶいてやること。
3. 自分が暗記している史料が受験問題で問われた時のために暗記するわけではなく、歴史を理解させ、また定着させるため、ということ暗記させる以前にしっかりと指導しておくこと。
4. やつこのことと言える暗記では意味がなく、体の一部分にすることを目的に、一字一句確実に暗記を徹底させること。そのためには単元が終了しても、授業時において定着度の確認が定

期的に必要なである。

この史料の暗記を以前は、一年次に日本史Aの授業を受ける生徒に強制していたこともあったが、同じ日本史科の教員から、理系を希望する生徒には負担が大きすぎるのではという指摘を頂き、その意見を採用して現在は二年次以降の日本史選択者に対して実施している。二年次において始めた頃は、強制的にさせられ、苛立ちを持っていた生徒が、三年次においては、後輩達に暗記をすすめるようになった話を何人も生徒から聞いたことがある。文句や不平不満を漏らしながら取り組んでいた生徒が、このように暗記の必要性を感じて変化したことは笑ましいことであるが、話を聞いてみると受験勉強において暗記してよかったと感じている部分が多いようである。これからの日本史を目指すあたり、歴史を理解する上でも大切なことであることを、生徒が後輩達に伝えてくれたならばこの上なく喜ばしいことであるのだが。繰り返しになるが、史料の暗記は暗記した事より暗記した過程が大切である。暗記をさせる際の指導の仕方によっては、受験のための暗記ではないことを理解させることが可能ではないかと思われる。今後の課題である。

2. 受験指導の考察

これからの日本史が、身に付けた日本史をもとに生徒が授業外で考えていくべきものであるのと同様に、日本史の受験勉強も、いま

まで述べてきた理解する日本史の勉強をもとに、授業外で各自が数多くの問題集をこなして、対処していくべきものである。が歴史がただ単に暗記ではなく望ましい形で理解されているにもかかわらず、模試等で日本史の結果が思うようにでてこない生徒が多く、また進学校として学校全体の日本史の実力を向上させなければならぬという使命も教員に科せられているのは事実である。これをやりなさい、あれをやりなさいの指示だけでは目的は達成できない。日本史の受験に向けての実力養成は、指導の仕方によって変わってくるものである。日本史を指導するようになってから毎年、どのような指導をしたら生徒が、自ずから受験勉強に向かうようになるかを考え模索してきた。通常の授業、補習、定期考査、課題等の指導を行う過程で、指導する上で定期的な積み重ねが必要であると考えられる指導内容を選び、最近数年間はそれを基本にした自分のスタイルで指導にあたっている。

その指導がどのような生徒にどのくらい効果があるのかの統計結果は得られていないが、同じ指導を受けてきた生徒の中で、全教科平均以下であったにもかかわらず、日本史のみ模試の結果が全国偏差値六十を超える生徒が目立ちはじめたことは事実である。大学により当然差はあるが、どの大学においても概して合格ラインとなる7割を勝ち取る為には、数多くの問題集に接する他には方法は無い。大切なことは、生徒自らがそれを自覚し、一冊でも多くの問題集に接する習慣をいかに早く身に付けさせるかである。ここでは、このような受験に対する望ましい習慣が身につけていない、あるいは

は認識されていない生徒、または、歴史を暗記ではなく、内容や変遷ともに理解して、定期考査では上位の結果を出せるが、模試等実力考査の結果が思わしくない生徒等を対象にした、実力向上の指導方法を紹介・報告したい。

○定期考査の分析を活用する

テストの結果を活用することは、学習の基本であり、どの教科においても実施されていることであろう。どのように活用するかは教科により、また指導教員により異なってくるが、この大切な事柄が、意外と無責任に放置されているのではないだろうか。活用させるには、活用の仕方をしっかりと明示し、それに対する評価をしなければ活用するべきことが指示されても、実際に実施するのは一握りの生徒になってしまう。そこで自分の日本史の指導においては、定期考査毎にテストの分析を行わせ、レポート用紙にて提出させている。

その分析の仕方であるが、日本史においては、一つの歴史用語を目にした時に、その歴史用語から関連した別な歴史用語を導くことができるかどうか、他の問題に対処することにつながっていく。そこで解答となった用語を調べさせることは当然指示するが、それにとどまるのではなく、関連事項を導き出させる作業を強制している。具体的な指示の出し方として徹底している事が、「各自がオリジナルの問題集解説書を作成する」というものである。教員が作成した定期考査の解答における解説書を、生徒自ら作成させるのであ

る。生徒はその過程で一つの歴史用語に関する関連事項を導き出さざるを得なくなり、また同時に理解度が足りなかった反省につながってくるのである。そして取り組み姿勢に対する反省を促すために、全体の分析を文章にさせることも実施している。今のところは時間的な制約から全体の反省に限定しているが、これを大きな問題毎に分析させると、より一層効果が大きいのではと思われる。これだけの作業をさせたからには評価の時間もとらざるを得ないが、関連させる方向が、多方面にわたり、あらゆる工夫がなされることを期待して評価してやればよい。関連性の方向に偏りが見受けられた場合には、しっかりとコメントしてやるべきであろう。最初は戸惑いを見せていた生徒も、回を重ねるごとに、より工夫するようになってきているのが確認できる。これをもとに次回のテストに対する取り組みに期待するため、一定の点数を決め、上位の生徒には自分が不正解であった箇所だけを課しているが、全員全問取り組みさせるのが望ましい事は言うまでもない。初めは望めないが、回数を重ねた三年生の中には、点数が達していたにもかかわらず自分の反省から全問取り組み生徒も若干名ではあるがでてくる。そのことから、これに取り組み過程の重要性が生徒にも認識されてきている証拠である。今後の課題としては、いかにこの作業を、定期考査以外の模試等でも、自発的に実践させるかではないだろうか。これも指導の方法によって導くことは可能と思われる。

○入試問題作成への取り組み

どの教科においてもいえることであるが、問題になりうる事柄と
いうものは、自ずから決まってくるもので、我々の間ではそれを通
常「ポイント」等の表現をしている。生徒の間ではいわゆる「やま」
にあたるものであるが、「ポイント」や「やま」なるものは、歴史の
内容を理解し、問題集をこなしていく過程で自然と理解されていく
ものである。私がよく教室で口にする事であるが、「やまは勉強した
ならば大いにはってかまわない。やまが理解できるくらいの勉強が
必要である」と（勉強しないでやまをはった場合に命取りになるこ
とは勿論強調した上での話だが）。つまり問題になりうるような重
要な事柄は、勉強の過程で自分で発見していくもの、というよりは、
自然に理解されてくるものなのである。したがって、やはり取り組
む過程が重要で、内容を理解せず、ただ単に歴史的用語の暗記では、
どんなに多くの時間をかけても出題者の意図や問題のパターンなる
ものは見えてこない。

そこで、今まで述べてきた指導方法に加え、実践させている事柄
が、長期休暇を利用しての入試問題作成の課題である。あくまでも
ポイントを見つけるのが目的ではなく、ポイントが自然に理解でき
るような取り組みを助ける一方法であることをわかっておきた
い。この課題を通じて、内容や変遷をより一層理解することにつな
がっていくのである。はじめ当初は、内容や変遷を否が応でも理
解せざるを得ないであろう、そういう期待からであったが、回を重
ねる毎に指導者側にも大きなメリットがあることがわかり、その後

の指導に大いに役立っている。その点をいくつか紹介する。

1. 問題の形式や工夫は自由とする為、生徒の日本史に対する意
識や取り組みがしっかりと問題作成にあらわれてくる。いわば
心理テストの要素をもっているのである。普段自分が時期や年
代に注意して勉強している生徒は、自然に年代や順番を問う問
題が目立ち、意味などを重視する者は、論述・記述問題が多く
なる。また、やたら細かいことを問いたがる生徒、あるいは難
問ばかり並べる生徒など、中には教員が思いもつかないところ
に目をつけ、感心させられるものもあり、また思わず笑いが出
てしまうものまで登場する。個人的な偏りは勿論、生徒全体に
共通する長所・短所等が見えてくるのである。授業を展開する
上で大いに参考になっている。

2. これも指導の上で大いに役立っている点では前の事柄と同じ
であるが、思いもよらないところで生徒が間違った解釈をし
て、その人数が予想以上で驚かされることしばしばあった。
一例をあげると、点数を決めて史料問題を必ず含めるよう指示
を出した時に、教科書の史料の冒頭につけられている題を、そ
れが正式な史料名や出典の名称と勘違いしていたことである。
指導者の指導不足といわれればそれまでであるが、それを機
に、史料名や出典の名称については十分な注意をほらい指導す
るようになった。

設問には必ず赤ペンで模範解答を記入させるため、誤字の多い（生徒が間違えやすい）歴史的事項も、定期考査や他の課題よりも多く発見できるメリットもある。このように生徒にも教員にも有益な指導方法なのである。そして、より過程が意味あるものになる為には、当然提出させるにあたり注意が必要となってくる。その注意点を列挙すると

1. 変遷を理解させる為にも、教科書の二・三ページを開いたことにより問題が完成してしまうような状態では無意味である。長い時代にわたっての問題作成が望ましい旨をあらかじめ指導しておくべきで、事前指導が大きな意味をもってくる。
2. あらゆる部門に目を向けさせるため、点数を決めて、テーマ史や時代を限定してやることも必要である。また前に説明したように、史料の学習が時代の流れをつかむことにもなる為、史料問題も義務付けるのがよい。
3. 長期休暇を利用しての時間のかかる作業の為、評価に費やす時間もそれ相応に必要である。時間をかけ、問題の偏り、時代の偏り、問題形式の工夫などしっかりコメントを残してやるべきである。時間的な制約があるが、史料問題を経験したならば、教科書の絵や写真を使用しての問題も取り入れるのもよいであろう。

この入試問題作成の課題は、長期休暇を利用して時間をかけて完

成されるものであるだけに、取り組む姿勢についての事前指導が重要となってくる。設問の体裁を整えることのみを急ぎ、歴史用語の内容や、時代の変遷を理解せず、完成を急ぐと、問題集を丸写ししたものと同様、取り組む意味がなくなってしまう。問題集を参考にすることは大いに結構であるが、時間をかけてじっくり完成させるよう指導が必要である。自分が採用している受験の指導法のうち、是非他教科にも取り組んでいただき、他教科が行う際の意見を基に、日本史の指導に役立たせたい指導がいくつかあるが、その中でもこの課題の指導法は、他教科の意見を最も参考にしたいと考えているもので、その多くの意見が、重要である事前指導を、さらに向上させるはずである。

○確認小テストから問題集の意義へ

先にも述べたように、受験のための実力向上は、問題集への取り組みの積み重ねであるが、それをしっかり認識し、どうやって自分から取り組ませるか、がどの教員も頭をかかえているところである。やらされる取り組みから自分からの取り組みに変えるためには、問題集の意義に気付かせなければならない。

授業時や講習時において、入試問題の解答解説を行っている時によく見かける光景で嫌味を言うことがしばしばあった。それは、生徒がノートに書いた解答に、赤ペンを使い○と×をつけ、あたかも、解答用紙を再提出するがごとく、きれいに仕上げているのである。

○や×は教員が判定をくだすときに使用すればよいもので、提出す

る必要がない自分だけのノートに丁寧な判定は無駄である。それよりも、模範解答に関連する必要事項を記入する方が重要だと思ってしまう。これをみると、丁寧で几帳面という両面の外に、問題集の役割が、知識を確認するためのもの、あるいは自分の勉強の度合いをはかるもの、または模試の準備的のもの等に誤って認識されているのではないかと不安になってくる。問題集に接することで多数の文章表現を学ぶことになる。同じ歴史事項でも表現の仕方がまちまちであることを学ぶことで、多方面からの問われ方に対処できるようになる。英語の単語を辞書で調べる時に、意味だけではなく使われ方を調べなければならない。だから意味が理解されていても同じ単語を何度も調べる作業が必要になってくると同様である。自動車運転免許の学科試験を受けられた先生方も少なくないと思うが、教本だけでは絶対に九十点の合格点を突破できないのも納得がいくはずである。問題集で理解を深め、実力をつけていくということが認識できた時、させられる取り組みではなく、自分からの取り組みへとかわり、望ましい状態で習慣化されていくのである。よって問題集については、解答・解説が丁寧なものは勿論だが、より多くの文章が記載された問題集が望ましいことも自分から気づいてくれるはずである。教員に「問題集はどのようなものがよいですか」との質問も結構だが、より望ましいのは、自分で実力向上に相応しいものを発見できることが、更なる発展へとつながる事を気付かせたい。

前置きが長くなったが、問題集の意義を認識させるための一つの方向付けとして私が日本史選択者に対して実践していることが、問

題集の確認テストである。副教材として購入させた問題集の範囲を決め、定期的に全く同じ問題で小テストを実施するのである。授業時の最初の約十五分間を使用し、特に点数はつけず原則全問正解を合格（問題によっては若干柔軟性をもたせる）とし、不合格者には数回の文章丸写しの課題をペナルティとして課すのである。これにより教科書以外の文章に慣れ親しませるのが狙いである。よってペナルティも罰が目的ではないことを、しっかりと指導しておく必要がある。一クラス四十数名のうち、はじめの合格者は十名前後であるが、回を重ねる毎に確実に合格者の人数が増えてくるのである。もし半数近くの生徒が合格となった場合には大成功と考えるべきであろう。合格できるようになった生徒に視点を宛ててみると、はじめは十名の合格者が次回は十五名になったとした場合、増えた五名の生徒のほとんどは、ペナルティを避けることを目的に頑張った生徒であることは疑えない。が、他教科をのいで日本史のみ全国偏差値六十を超えることができるようになった生徒のほとんどは、この五名の中に入っているのである。そしてこの確認テストを経験した生徒達が、初めて日本史の模試を経験した時に、必ずや手ごたえを感じ、勿論全員とはいかないが、問題集の大切さを認識し、自然に習慣化させていく生徒が増えてくる。これまでの受験指導と同様に問題点等を並べると

1. 時間的制約から、回を重ねた場合、前の範囲を重複させなければならぬ。古い範囲は何回も重複して勉強することになる

が、新たな範囲がどうしても手薄になる。

2. 問題集と問題を同じにする為、授業時に行う場合には、クラス毎に問題を準備しなければならない。つまり、受け持っているクラス分だけの問題が必要になる。

一冊でも多くの問題集をこなしていく、その習慣化の必要性に自分で気付くためにも、まずは、副教材である一冊の問題集を体の一部にすることが必要不可欠である。問題点を克服するためには、試験監督等、教科を超えての協力が必要であるかもしれない。

以上、受験指導の方法を三つ報告・紹介してきた。定期考査の分析、入試問題作成、問題集の確認テストの三つである。

この三つの指導方法は、確かに、これから日本史の実力をつけていこうと考える生徒、あるいは、実力向上のための習慣的方法が発見できていない生徒等を対象に考案され、始めたことであることは否定しない。が、歴史の流れや問題集の習慣化を理解し、全国偏差値六十をすでに上回っている生徒にとっても有益で、時間の無駄になっていないことも事実である。それらの生徒はこれらの課題を積み重ねる過程で自分の盲点となっている時代や部門史、追求すべき問題集を発見できることは確実である。個人の家庭教師ではない我々が、生徒の間に差がある中で、どの生徒に焦点をあわせるか、各教科においても常に付きまとう難しい問題である。その点、多くの生徒から指示を得られている塾や予備校の各講師の先生方や、実力の差が激しい、公立の小学校・中学校の先生方には感心させられ

る。ただ共通していえることは、学校においても塾や予備校においても、どの先生方も、一部の生徒を対象に考案されたことでも、結果的にはあらゆる生徒に有益となる指導方法を模索しているはずである。これら三点の指導について、どれをとっても上位に位置する生徒達が、回を重ねる毎にパーフェクトを目指したり、よりよい工夫を追究している様子が覗える。そういう点でこの三点は自信をもつてあらゆる生徒に有益であると確信できる。

受験が年毎に変化している状況もあり、それに対する対処をはじめ、受験指導における課題は多く残されている。限られた時間内でこれらの指導をいかによくしていくか、またすべて授業指導において実施しているため、日本史を受験科目として必要としない生徒も若干名ではあるが、そういう中で、次は上位者に視点をあて、その指導があらゆる生徒に有益となるような指導があるのでと現在検討中である。

おわりに

高等学校における日本史の授業がどうあるべきかで始まった今回の報告であるが、これからの日本史に向けて、理解する日本史と、大学入試に向けての受験指導の日本史と、別々に説明してきた。この両者はどちらにおいても過去の歴史用語の羅列を目的に行われた場合には、その目的を達成するのみにとどまってしまい、そこから発展は望めないものである。

これからの日本史になりうるような授業をどのように展開してい

くかは、各教員の持ち味が生かされて考案されているわけだが、それを受け入れる下地をつくってやることも授業において大切なことである。その努力が怠った場合には、歴史における研究知識や能力があつてすばらしい授業展開ができたとしても、歴史は暗記の教科であるというイメージから抜け出すことはできないのである。そのため私は、歴史の変遷や史料を重視しての理解する日本史を提唱した。まだまだ検討の余地があり、これについてもより一層の追求が必要であるが、これ以外にも当然理解する日本史に向けての方法を考案していかなければならない。この発展が自ずから、生徒の受験に対する意識も望ましい方向へと導いてくれるはずである。

受験指導については、内容を理解することは勿論だが、歴史用語の関連性を把握し、あらゆる設問に対応できる力を養うと同時に、問題集の習慣化の大切さに気付かせる事を目標に、定期考査の分析、入試問題作成の課題、問題集の確認テスト等を提唱した。これも当然、望ましい方向へ向けての考察がまだまだ必要であるが、生徒がこれらの過程をしつかりと踏むことができた場合には、入試の成功は勿論だが、この過程がこれからの日本史のための素材にながつていくのである。実生活に向けての日本史の指導と、受験指導は、相乗効果をもたらしてくれる。また、どちらにおいても相乗効果をもたらす様、指導が成されるべきだと思う。

人間社会どこにおいてもいえることであるが、ひとつの目的に向かつて邁進したことは、その目的を達成させる以外に大きな効果や成果をもたらすものである。そして人が生活する上で、気をつけな

ければならないことがその逆である。やるべきことを怠った場合には、その目的が達成できない以上に別なマイナスが大きいのということ。私は、以前ソフトボール部の監督を務めていたこと、「とるべき時期があるが、その指導の時によく口にしていたことが、」とるべきアウトを取れなかったときのマイナスは想像以上に大きい」と。日本史の指導も一つの目的を徹底させるべく過程がしつかりと踏まれたならば、その目的を達成する以上にプラスは大きい。がその逆のマイナスを忘れてはならない。

日本史の授業がどうあるべきか、私は、このプラスとマイナスについて、日本史を通じてどう教えるかを授業のあるべきすがたの一つに考えている。望ましいのは、歴史的事実からそのことを生徒に気付かせるような授業展開で、今後の課題としていきたい。しかし、歴史事実ではなく、今回紹介・報告した指導に取り組む過程でも、相乗効果を体験することで、プラス・マイナスの作用を十分理解できると考えている。つまり、歴史事実での学習ではなく、歴史への取り組む過程での学習である。最後にもう一度言及するが、これからの日本史に向けての理解する日本史や、関連事項を導き出せるような受験の日本史に取り組み、相乗効果を経験できたならば、歴史的事実は大いに忘れてかまわない。取り組む過程の日本史が重要で、記憶された日本史は一切必要ないのである。年代を例にあげれば、大化改新と鎌倉幕府・江戸幕府の創設くらいは常識として記憶していてもよいかもしれないが。たとえそれを知らなくても世の中は十分に渡っていけるはずである。

今回このように報告のよい機会が与えられたため、これにより多くのご意見やご指摘を頂き、さらに取り組む過程が重要に成りうる授業を目指して、努力していきたい。そのためにも同教科は勿論、是非、教科を超えてのご意見をいただけたら幸いである。

【注】

- (1) 政治の中心がどこであったかによる時代区分をいう。
- (2) 難波京(摂津国)・恭仁京(山城国)・紫香楽宮(近江国)に遷都した時期もある。また広義には七九四年の平安京遷都までをいう場合もある。
- (3) 藤原(中臣)鎌足の二男。大宝律令、養老律令制定に活躍。律令制確立に貢献。
- (4) 天武天皇の孫。藤原没後従二位右大臣として政界の首班となる。
- (5) 藤原不比等の子四人で、武智麻呂(南家)、房前(北家)、宇合(式家)、麻呂(京家)。聖武天皇の皇后となる光明子はその妹。
- (6) 美努王の子。藤原四兄弟の没後、大納言、右大臣となり、聖武天皇のもとで政権を掌握。
- (7) 南家武智麻呂の二男。光明皇后の信任を得て、政界に進出。七五八年、惠美押勝と改名。
- (8) 法相宗義淵の弟子。称徳天皇庇護下に政界に進出。仏教重視の政策を推進。
- (9) 天智天皇の孫。六十二歳で藤原永手、藤原百川らに擁立され、律令制再編の先駆的施策を進めた。子が桓武天皇。
- (10) 文武天皇の子として藤原京に生まれる。七二四年、元正天皇の譲りをうけて即位。藤原不比等の娘光明子を皇后とする。仏教を厚く信仰した。
- (11) 歴史学研究の材料となる文献をさす。
- (12) 後漢の班固が著した歴史書が、『漢書』で、地理志に倭人の記事がある。日本に関する最古の文献で、紀元前一世紀の様子がうかがえる。
- (13) 南朝宋の范曄の撰が『後漢書』で、東夷伝倭条に、一〜二世紀の倭国の遣使の記事がある。
- (14) 中国の正史である『三国志』の『魏書』東夷伝倭人条の略称。邪馬台国を含め、3世紀の倭国の状況を記す同時代の中国からみた貴重な史料。
- (15) 高句麗の長寿王が建てた高さ六・四メートルの石碑に刻まれた碑文。長寿王の父である好太王(広開土王ともいう)の在位、対外戦争の勲績を記す。
- (16) 中国南朝の正史。巻九七夷蛮伝の倭国条は、倭の五王(五世紀)の根本史料。
- (17) 隋朝の歴史を記した中国の正史の一つ。巻八十一の東夷伝に倭国の記事あり。六〇七年に倭王の使者(小野妹子)が書をもたらした事等を載せる。
- (18) 六四六(大化二年)、孝徳天皇によって難波長柄豊碕宮で発せられた四か条からなる詔で、律令体制の骨格をなす。
- (19) 七四一(天平十三年)、聖武天皇が発した詔で、国分寺・国分尼寺の運営を規定。
- (20) 河内国知識寺の丈六仏を拝した聖武天皇の発願により、七四三年、近江紫香楽宮で造営が開始された。
- (21) 七三三(養老七年)、発布された開墾を奨励する法令。新しく灌漑施設を設けた場合は三代、旧来の施設を利用した場合は本人一代の用益権を認めた。
- (22) 七四二(天平十五年)年に発布された墾田を永年収公せず私財とする法令。荘園発展の基礎となる。
- (23) 後小野宮右大臣藤原実資の日記で、摂関政治全盛期の中央政界の情勢が詳細かつ正確に描かれる。
- (24) 鎌倉前期慈円が著した史書。国初から承久の乱前後までの歴史を述べている。ここでは、記録荘園券契所の設置の部分。

(25) 平安時代末期に活躍した平清盛と一門の興亡の歴史を描いた軍記物語。

(26) 仏教の教説に基づき、仏や菩薩が国家を鎮護するという思想。

(27) 数研出版『重要問題演習日本史B』を使用

【参考辞典】

- 『日本史辞典』岩波書店
- 『国史大事典』吉川弘文館
- 『日本歴史大辞典』河出書房

【参考文献】

- 「奈良朝政治の推移」笹山晴生
『岩波講座日本歴史古代3』（一九六七）
- 「奈良時代の政治過程」野村忠夫
『岩波講座日本歴史古代3』（一九七六）
- 『日本古代の国家と仏教』井上光貞
岩波書店（一九七一）
- 『藤原仲麻呂』岸俊男
吉川弘文館（一九六九）
- 『道鏡』横田健一
吉川弘文館（一九五九）